

ヘーゲルの推理論 (二)

尼 寺 義 弘

はじめに

A 定有の推理

a 推理の第一格「E—B—A」……以上前号

b 推理の第二格「B—E—A」……以下本号

c 推理の第三格「E—A—B」

d 推理の第四格「A—A—A」

定有の推理のまとめ

b 推理の第二格「B—E—A」

推理の第二格は、すでに第一格のむすびでみたように、第一格の二つの前提「E—B」および「B—A」それ自体の根拠を問う課題として提起された。そして第二格は、第一格の二つの前提のうち一方の前提「B—A」を媒介する推理である。第一格の結論「E—A」をうけて、第二格は個別が媒辞をなす推理「B—E—A」である。^注この推理の二つの前提は「B—E」および「E—A」である。

「B—E」はいまだ媒介されていない直接的な前提であるが、「E—A」はすでに媒介された第一格の結論である。

注 ヘーゲルは第一格から第二格への移行にあたり、媒辞が個別となる必然性についてつぎのように述べている。形式的推理の媒辞は、事物の概念に根拠をもつものではなく、内容からみても形式からみても偶然的である。この媒介の偶然性・恣意性・直接性の担い手がいまや個別である。すなわち第一格の結論「E—A」から「個別は両項の普遍性として、あるいは媒辞として定立される」。「個別は同時に両項の統一である」。⁽¹⁾ヘーゲルは、このように、一方で普遍性の意味をもつ個別を媒辞とする。他方で多様なもの・諸属性の合体である個別が媒辞をなすことは、第一格の偶然性を証明するものである、と述べている。

なお「小論理学」では、第二格は「A—E—B」となり、AとBの位置が「大論理学」とは逆である。すなわち「第二格は普遍を特殊と結合する。(普遍は第一格の結論から、個別性によって規定されて、第二格へ移るのであるから、第二格では直接的な主語の位置を占めるのである。)」⁽²⁾第三格も「小論理学」では「B—A—E」であり、「大論理学」の「E—A—B」とは順序が逆となっている。第一格「E—B—A」からの円環性を考慮すると、「小論理学」の方が一貫していると考えられる。もっとも両項の形式的な位置づけの問題は重要な論点をなすものではない。

ヘーゲルによれば、「B—E—A」という形式からいって、この推理の一方の前提である「B—E」は、第一格からの本来の順序である「E—B」を転倒している。かくして「B—E」の主語は個性の規定をもつ特殊である。そして「B—E」の述語は、媒辞の、すなわち特殊性の規定をもつ個別である。したがって「B—E」を構成する両者の関係は、第一格のような抽象的な直接性ではない。各々が相手の位置を占め、自分本来の規定とともに他の規定を内に含むことになる。^注そして第二格の普遍は、他方の前提「E—A」として本来の述語の位置にある。

注 ヘーゲルは「B—E」の関係について述べている。個別が特殊の述語となることによって、個別は特殊に対して「否定的に關係する」。特殊はこの「否定的統一」(區別)によって規定性を「剣奪」され、普遍へと高められる。⁽³⁾

ヘーゲルは定有の推理を全体として偶然的・恣意的な推理とみている。しかし定有の推理の内部においても、右のように、一面では、普遍・特殊・個別からなる概念の「弁証法的運動」としてとらえようとしている。他面では、のちにみるように、形式的推理の形式性にひきずられるのである。ヘーゲルの思考方法には、つねに根源的三元論あるいは論理的三元論が存在する。すなわちあるときは形式論理學に従った推理の把握の仕方であり、またあるときは弁証法的思维形式による、体系構成上の必要性あるいは統一性のためからくる把握の仕方である。この二つの方法が混在し、区別されずに恣意的に用いられている。

しかし、概念規定の進展があるにもかかわらず、各名辞はなお直接的な規定にとどまっている。個別と特殊の変更された「位置」も外面的な形式にすぎず、「偶然的な個別性」⁽⁴⁾によって結合される二

二

つの質である。かくして第二格も、第一格と同様に、直接的な推理であり、各項は互いに無関心な内容である。推理の概念からいっていまだ概念の実現していない抽象的な形式的推理である。

ところで、第一格の第二格への移行は、「概念の実在化の始まり」⁽⁵⁾(die begonnene Realisation des Begriffs)であり、「媒介の否定的契機」の質的名辞のなかへの最初の定立である。つまり推理の形式は「他のものになる」(Anderswerden)のである。したがって第二格は、外的反省にもとづく主観的推理における類(第一格)「E—B—A」の単なる「一つの種」⁽⁶⁾ではない。^注

注 形式的推理は、ヘーゲルによれば、第一格が基準をなし、他の格は第一格の一種類である。そして諸格相互の媒介関係、必然的な関係は意識されていない。公理と規則にもとづく形式的推理の正しさが問われるだけである。ヘーゲルは推理の概念より諸格の相互関係をつけようとするのである。

第二格「B—E—A」の二つの前提「B—E」あるいは「E—B」と「E—A」において、媒辞Eは二度包摂される。つまり媒辞は二つの前提のなかで、いずれの場合も主語であり、他の名辞はこの主語に内属する。^注だから、第一格の媒辞Bのように、一方で述語として包摂し「E—B」、他方で主語として包摂される「B—A」ものではない。ここに第一格に対する第二格の独自性がある。

注 ヘーゲルは、第二格のはじめにみたように、一方で、この「B—E—A」の一つの前提「B—E」について、特殊が主語であり、個別が述語であると述べていた。他方で、ここで述べているように、媒辞である個別

が「E—B」および「E—A」として主語であり、BおよびAによって包摂されるとしている。これはつぎにみる形式的推理の第三格と関連している。

第二格の「B—E」は規定的判断「E—B」の否定(区別)である。したがって結論「B—A」は「無規定的な」特称判断である。

つまりこの結論は規定に対して無関心なもの、「肯定的である」ともに否定的である^{(7)注}。

注 この部分は難解であり若干の説明を要する。まずヘーゲルはここで形式的推理の第三格を意識していることである。ヘーゲルの定有の推理の第二格は、形式的推理の第三格に相当する。

つぎに形式的推理からみれば、「B—E」すなわち個別が特殊の述語となることは、たとえば、特称肯定判断「若干の赤はバラである」あるいは特称否定判断「若干の赤はバラではない」に示されるように、特称判断としてのみ成立する。ヘーゲルも自己の第二格の論究の過程で、前提の一つと結論とが特称判断であるという形式的推理の第三格に自己の推理を適合させている。

ヘーゲルには、右のように、推理についても一方では形式的推理の見方があり、他方では彼独自の弁証法の見方がある。この両者が区分けされず混在しているところに難解さの一つの根拠がある。

なお形式的推理の第三格は、上図のように、媒辞は大小両前提においてともに主語の位置を占めており、「(一)小前提は必ず肯定でなければならぬ、(二)結論は特称でなければならぬ」という規則が生じる⁽⁸⁾。

$$\begin{array}{r} M-P \\ M-S \\ \hline S-P \end{array}$$

ところで、第二格の媒辞は直接的個別性である。それは「無限に多様な多面的な規定有⁽⁹⁾」である。だから、第一格の真理である媒介の偶然性および主観性が、第二格の媒辞で明らかにされることとなる。

る。ヘーゲルによれば、個別による媒介は、個別とは別の媒介を、「抽象的普遍」にもとづく媒介を指示する。媒辞である個別性が、規定的関係である特殊の規定性を止揚し、抽象的普遍性であるかぎり、個別は特殊と普遍とを結合する。そこで普遍を媒辞とするつぎの第三格が登場する^{(10)注}。

注 このようにヘーゲルは、第二格から第三格への移行を、「有の移行」と同様であるとして、内在的・思弁的に進行させようとする。だが、この移行の仕方、さきの第一格から第二格への移行のそれと同様に、なぜ普遍が媒辞となるのか、明示的ではない。定有の推理の前提からすればそれは不可能なことであろう。しかしヘーゲルは「概念の實在化」の進行という思弁をここに導入するのである。

この移行は、第一格「E—B—A」の二つの前提「E—B」と「B—A」のうち、後者の媒介の考察を終えたので、つぎに前者の媒介の分析に向かうとすれば足りることではないだろうか。

注

(1) Hegel, *Wissenschaft der Logik*, II, S. 365. 『大論理学』下巻、一四二頁。

(2) Hegel, *Enzyklopädie*, I, S. 338. 『小論理学』下巻、一六六頁。

(3) (4) (5) (6) (7) Hegel, *Wissenschaft der Logik*, II, S. 366-368. 『大論理学』下巻、一四三—一四五頁。

(8) 速水滉『論理学』岩波書店、一八六七年、一六六頁。千葉茂美他共著『論理学入門』学陽書房、一九七四年、七一—七二頁。

(9) (10) Hegel, *Wissenschaft der Logik*, II, S. 368-369. 『大論理学』下巻、一四六—一四七頁。

c 推理の第三格「E—A—B」

第三格は普遍を媒辞とする推理であり、自己の直接的な前提をもたない。すなわち「E—A」は第一格によって、「B—A」は第二格によってすでに媒介されている。したがってこの推理は、前の二つの格を前提しているが、逆に前の二つの格もこの第三格を前提する。つまり形式的推理の三つの格は、それぞれ互いに他の二つの格を前提しており、「相互媒介」の関係にある。第三格によって形式的推理の規定は「完成」する。⁽¹⁾_注

注 もちろんつぎにみる第四格が存在する。しかし、第四格は質的区別のない全くの形式主義「A—A—A」を表現する。

ところで、第三格の媒辞は特殊を抽象した外面的な「抽象的普遍」「無規定的な普遍」である。だから両項は媒介されるべき「本質的規定性」の面から、すなわち推理の概念からは結合されていない。ここに形式的推理の「形式主義」⁽²⁾という本性が示されている。つまりこの形式的推理によって推理を構成する各名辞のもつ内容規定と形式規定とが互いにバラバラであり、さらに各名辞は互いに全く無関心の関係にあることが表わされている。

媒辞である普遍は、「E—A」および「B—A」の述語として両項を包摂する。「この推理も推理の一種として推理に一致すべきだとされるかぎり、このことはつぎのような仕方でのみ可能である。つまり、一方の関係E—Aがすでに適切な関係をもっているのであるから、他方の関係A—Bも同じく適切な関係をもつという仕方

のみ可能である。そしてこのことは、主語と述語との関係が無関心的であるような判断において、すなわち否定判断においてのみ可能である。そうすると推理は正しいものとなるが、結論は必然的に否定となる」。⁽³⁾_注

注 ヘーゲルの第三格は形式的推理の第二格に相当する。この第二格は左図のとおりである。媒概念Mは大小両前提においてともに述語である。

P—M	S—M
S—P	

かくして第二格に特有な規則はつぎのとおりである。第一に「前提の一つは否定でなければならぬ」。第二に「大前提は全称でなければならぬ」。前提の一つが否定であるから、結論は否定である。ヘーゲルは右の関係を考慮し、「A—B」が否定判断となることによって結論も否定となると述べ、形式的推理の第二格に自己の第三格を一致させている。

ヘーゲルによれば、「A—B」は「AはBではない」という否定判断である。⁽⁴⁾_注 結論「E—B」もしたがって「EはBではない」あるいは「BはEではない」という否定判断である。否定判断は主語と述語の関係が互いに無関係な判断である。したがって大前提と小前提の位置も互いに無関係なもの、取り替え可能なものとなる。これがアリストテレスの知らなかった第四格「A—A—A」の「根拠」⁽⁵⁾となる。第四格は各名辞の「外面的統一」を、「同等性」を規定としてもつ「没関係的な」数学的推理である。

注I 「A—B」が否定判断であるとは形式論理学の立場からみて、「普遍は特殊ではない」ということである。つまり抽象的普遍と規定された特殊とは全く無関係であること、その意味で主語と述語とはともに周延しているのである。

注Ⅱ ヘーゲルが形式的推理の第二格を自己の第三格とした一つの理由として第四格への移行が考えられる。すなわち普遍が媒辞をなし、結論が否定判断であることから、主語と述語との、したがって大前提と小前提との全くの無関係性を導き、「没関係的な推理 $A-A-A$ 」⁽⁵⁾を生みだしたのである。もっともヘーゲルの第二格も前提に無規定的な判断を含み、結論は特称判断である。したがって各名辞の關係は「無関心的なものである」⁽⁶⁾。だが、特称判断は主語と述語との「若干の」部分が一致する關係にある。

注

(1) (2) (3) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 369-370.

『大論理学』下巻、一四七—一四八頁。

(4) 速水滉『論理学』一六五頁。千葉茂美他共著『論理学入門』七一頁。

(5) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 371. 『大論理学』下巻、一四九頁。

(6) Ebenda, S. 368. 同書一四六頁。

d 推理の第四格「 $A-A-A$ 」

数学的推理は「 $A-A-A$ 」である。この推理の根拠は、「二つの物または規定が第三のものに等しいときは、二つは互いに等しい」⁽¹⁾にある。「 $A-A-A$ 」であることから各名辞の内属・包摂の關係は消えている。そして「第三者は一般に媒介するもの」であるが、この推理においては媒介者は両項に対して何の規定ももたない。

数学的推理は「公理」である。すなわちいかなる証明や媒介や前提をも許さない「絶対的に自明な第一命題」Ⅱ公理である。しかし

この推理の本来の対象である「量的規定」は、あらゆる質的区別と概念規定を捨象してえられたものである。したがって概念や「概念的把握」は存在せず、「形式的で抽象的な」ものである。公理のいう自明さは、「悟性」さえもたない思惟規定の「貧弱さ」、⁽²⁾「形式主義」を表わしている。^注

注 ヘーゲルは、右のように第四格を数学的推理としており、さらに第一、二、三格の真理は、第四格の形式主義にあるとみている。

形式的推理では、第四格は左図のとおりであり、規則としてつぎの三つが得られる。

$$\begin{array}{c} P-M \\ M-S \\ \hline S-P \end{array}$$

第一、「大前提が肯定ならば、小前提は全称でなければならぬ。」

第二、「小前提が肯定ならば、結論は特称でなければならぬ。」

第三、「前提の一つが否定ならば、大前提は全称でなければならぬ。」⁽³⁾

以上のように、ヘーゲルは定有の推理の意義と限界の極みを数学的推理において明らかにし、つぎに定有の推理より反省の推理へ移行する。^{注1}

注Ⅰ 定有の推理から反省の推理への移行において、「小論理学」は「形式」すなわち諸格および諸項の相互媒介關係についてつぎのように述べている。

(1) 各モメントはいずれも媒辞の、したがって全体的なものという規定および位置を獲得し、このことによってそれらが抽象であるという一面性を即自的には失っている。(2) 媒介が同じく即自的にはあるが——すなわち互に前提しあう媒介からなる円環としてではあるが——完成されている。第一格、「 $E-B-A$ 」においては、二つの前提「 $E-B$ 」および「 B

「A」はまだ媒介されていず、前者は第三格において、後者は第二格において媒介される。しかしこれら二つの格の各々もまた、その二つの前提を媒介するものとして他の格を前提している。

したがって概念の媒介の統一は、もはや単に抽象的な特殊性としてではなく、個別性と普遍性との発展した統一として定立されなければならない。それはまず両者の反省的統一、すなわち、同時に普遍性として規定されている個別性である。こうした媒介が反省の推理を与える。⁽⁴⁾

定有の推理の諸格は、このように、相互に前提しあっている。^{注II} 媒辞は概念の統一として、形式的ではあるが、両項を媒介する。特殊・個別・普遍が、交互に媒辞の地位を占める。諸格は「媒介にもとづく媒介」、「媒介に自己が関連する媒介」、「反省の媒介」である。諸格の推理は、「相互前提」関係という「円環」、「全体性」をなし、自己の前提への自己「帰帰」である。ここに形式論理学の推理構造との差異が鋭く示されている。

定有の推理から反省の推理への移行には、ヘーゲル特有の「弁証法的運動」⁽⁷⁾という思弁がある。ヘーゲルはこの移行のために定有の推理の媒辞の意味していた所与の直接性から具体的な同一性あるいは具体的な統一性を導き出そうとする。ここにも論理の展開過程と具体的な事物の発展過程との同一性を主張するヘーゲル特有の方法上の問題が示されている。

だがそれは不可能なことである。むしろ定有の推理には、推理形式として多くの限界や不充分性があるのであるから、その限界や不充分性を解決する新しい推理形式へ移行するとすれば足りることであろう。

注II 「小論理学」は三つの格の客観的意味についてつぎのように述べている。

「推理の諸格の客観的な意味は、一般にあらゆる理性的なものが三重の推理として示されるということ、すなわち、その各項はいずれも端項の位置を占めるとともに、また媒介する媒辞の位置をも占めるということである。たとえば、哲学の三部門をなす論理的理念、自然、および精神がそうである。最初は自然が中間の連結する項である。自然すなわちこの直接的

な全体性は、論理的理念と精神という両項へ展開する。精神は、自然に媒介されているかぎりにおいてのみ、精神であるからである。しかし第二には、われわれが個的なもの、活動的なものとして知っている精神が媒辞となり、自然と論理的理念とは両項となる。自然のうちに論理的理念を認識し、かくして自然をその本質にまで高めるのは、精神であるからである。同じく第三には、論理的理念そのものが媒辞である。理念は精神および自然の絶対的な実体であり、普遍的なもの、すべてを貫いているものだからである。これが絶対的な推理の諸項である。」

レーニン「ヘーゲルの「論理学」の摘要」のなかで右の「小論理学」の説明についてつぎのように述べている。⁽⁸⁾

注意

ヘーゲルは「ただ」この「論理的理念」、法則性、普遍性を偶像視している

「自然すなわちこの直接的な全体性は、論理的理念と精神へ展開する」。論理学は認識にかんする理論である。すなわち認識論である。認識は人間による自然の反映である。しかしそれは単純な、直接的な、全体的な反映ではなくて、一連の抽象からなる過程であり、諸概念や諸法則などの定式化、形成からなる過程である。そしてこれらの概念や法則など（思考、科学）「論理的理念」もまた、たえず運動し発展している自然の普遍的な合法則性を条件的、近似的に包括するものである。ここにはじつさいに、客観的に三つの項、すなわち（一）自然（二）人間の認識（三）人間の脳髄（同じ自然の最高の産物としての）および（三）人間の認識における自然の反映の形式がある。そしてこの形式が概念や法則やカテゴリーなどである。人間は自然を全体的に完全に、すなわちその「直接的な全体性」を把握するに反映するに模写する、ことはできない。人間は、抽象や概念や法則や科学的な世界像などをつくりながら、たえずそれに接近していくにすぎない。

注

- (1) (2) Hegel, *Wissenschaft der Logik*, II, S. 371-372. 「大論理学」下巻、一五〇—一五一頁。
 (3) 速水滉『論理学』一六七頁。千葉茂美他共著『論理学入門』七二—七三頁。
 (4) Hegel, *Enzyklopädie*, I, S. 340-341. 「小論理学」下巻、一七〇頁。
 (5) (6) (7) Hegel, *Wissenschaft der Logik*, II, S. 373. 「大論理学」下巻、一五一頁。
 (8) Hegel, *Enzyklopädie*, I, S. 339-340. 「小論理学」下巻、一六八頁。
 (9) W. I. Lenin, *Konspekt zu Hegels „Wissenschaft der Logik“*, In: W. I. Lenin Werke, Bd. 38, Dietz Verlag Berlin 1981, S. 172. ノーリン『哲学ノート』(松村一人訳) 第一分冊、岩波文庫、一九六四年、一六〇頁。

定有の推理のまとめ

定有の推理に対するヘーゲルの思考には、異なる二つの考え方が交差しており、それが互いに区別されなまま共存しているといつてよい。すなわち一面では、形式論理学の定言三段論法の諸格の規則に即応した説明の仕方であり、他面では、思弁をともなったヘーゲル本来の弁証法的方法である。この点についてみることにしよう。

ヘーゲルは形式論理学の推理形式についてつぎのように述べている。すなわち形式的推理のもつ「正しい推理」の「精緻」さに反対する「自然的・悟性」(人間)の「排撃」や「理性形式の人工的知識」に反対する立場に理解を示しつつ、正しい推理をするための専門知識が理性的思惟の条件とすると、そのことは「人間が解剖学や生理

学を学ばなければ、歩くことも消化することもできないとなると厄介なことなのと同じである⁽¹⁾。

しかし、他方では、これらの学問が、「食餌療法にとって無益でないように」、この「理性形式」の研究つまり「理性の運用の仕方」やその法則を対象とする研究⁽²⁾が、「思考の正しさ」に対して「重大な影響」を与えるものであり、「自然の法則やその特殊な諸形態についての知識」に比べて劣ることのない価値をもつとしている。したがってヘーゲルは形式的推理の意義を認め、評価するのである。

以上のことを前提したうえで、ヘーゲルは、形式的推理の「不完全さ」が、推理の「悟性的形式」つまり概念の「抽象的形式規定」にあるとする。すなわち媒辞による諸規定の結合関係(統一)のなかにこそ推理の推理たる意義があるにもかかわらず、概念の諸規定がそれぞれ「抽象的な質」⁽³⁾であり、バラバラの孤立した規定性にとどまっている。概念諸規定は抽象的・形式的・個別的・直接的な質にとどまってい、媒介(統一)されるべきモメントが欠如しているのである。

かくして推理は、ヘーゲルによれば、諸規定の「関連」が軸をなすべきであり、内属と包摂もつぎのように改造される。

「個別に普遍が内属するから個別はそれ自身普遍であること、また普遍が個別を包摂することから普遍はそれ自身個別であるということである。このことをさらに詳しく言えば、推理はまさにこの統一を媒辞として明白に定立するものであり、したがって推理の規定

はまさに媒介であること、言いかえると概念諸規定はもはや判断におけるように、その相互の外面性をもたず、むしろ諸規定の統一を基礎としてもつものだということである。⁽⁴⁾

このように形式的推理の内属・包摂関係を改造し、「個別」「普遍」という概念の統一性・媒介性を推理の基本とするのである。

さらにヘーゲルは推理の弁証法的運動を展開する。形式的推理は媒辞のもつ統一性と両項の異質性との矛盾をもつ。この矛盾が推理を「弁証法的」とする。「推理の弁証法的運動は、推理を完全な概念の諸モメントのなかで叙述し、その結果あの包摂の関係あるいは特殊性が、推理の結合のモメントであるのみでなく、また本質的にはむしろ否定的統一と普遍性とが、推理の結合のモメントであることを明らかにする。」⁽⁵⁾

推理は、ヘーゲルにとって、個別・特殊・普遍という概念の三モメントの相互媒介の運動である。すなわち「E—B—A」・「B—E—A」・「E—A—B」であるといえる。諸格相互および各格内部の諸項の媒介性・統一性・有機性である。この媒介性を通じて各格の拠って立つ自己の前提が明らかにされ、真なる推理へと展開されていく。

推理の本質はかくして媒辞にあるといえる。定有の推理では、媒辞はBからEへ、EからAへと展開され、不完全な媒辞から完全なそれへと発展する。全過程を通して媒辞は、個別的な規定ではなくて、「全体性」を表現するのである。⁽⁶⁾

ヘーゲルはこのように推理の弁証法を、のちの反省の推理および

必然性の推理で開花する弁証法を簡潔に展開しているといえる。

ヘーゲルの定有の推理は、以上みてきたように、定言三段論法に対応するものであるが、この形式的推理を批判し、独自の推理論を構築しようとするものである。すなわちその内容は、第一格から第四格まで、それぞれ独自の意義をもっており、また各名辞の概念規定は、抽象的普遍にもとづく形式的推理のそれとは異なる。ヘーゲルは普遍的形式のなかに独自の弁証法によって有機的連関をみようとする。

一方で形式的推理の規則に従いつつ、他方でその論理を越えた方法を随所に提示し、「概念の実在化」や「否定的統一」および各格への移行の必然性を述べている。この方法は、概念↓判断↓推理への展開に対応しているといえる。したがって展開はダイナミックであり、けっしてスタティックなものではない。^注

注 牧野廣義氏のヘーゲル推理論の分析は、形式的推理の公理および規則からヘーゲルの矛盾をつく批判であり、概ね正当なものである。⁽⁷⁾しかし形式的推理批判と「弁証法」的推理の構築というヘーゲルの独自の意図からすれば、形式的推理から考量する氏の批判はヘーゲルの一面的な評価とならないであろうか。

注

(1) (2) (3) (4) Hegel, *Wissenschaft der Logik*, II, S. 374-376. 『大論理学』下巻、一五三—一五四頁。

(5) (6) Ebenda, S. 376-377. 同書一五五頁。

(7) 牧野廣義『ヘーゲルの推理論と形式論理学』、大阪経済法科大学『経済学論集』第七巻、第四号所収、一九八三年。

(一九九〇年二月一三日受理)